

第 6 回定例会抄録

食事は楽しく・栄養はしっかり・薬はきっちり

わかくさ竜間リハビリテーション病院 野崎園子

食事をするという動作は、食べ物を認識して、口に入れ咀嚼し、咽頭に送り込んでのみ込み、食道から胃に送る一連の動作の連携であり、「摂食嚥下」と呼ばれる。摂食嚥下は、随意運動・反射運動・自律運動が連携しており、4 期モデルとプロセスモデルの 2 つの嚥下モデルがある。嚥下運動は延髄の嚥下中枢とさらに上位の脳などの脳の支配を受ける。

この摂食嚥下が様々な原因で障害されることを、「摂食嚥下障害」という。

「食事は楽しく」食は人間の基本的欲求であり、楽しみである。摂食嚥下障害による食の制限・誤嚥や窒息による苦しみをできるだけ減らしたい。摂食嚥下リハビリテーションは訓練とリスク管理により、食の楽しみをサポートする医療である。

「栄養はしっかり」食事は楽しみとともに必要な栄養を摂るためのものでもある。栄養状態が良くなれば、摂食嚥下状態もよくなり、肺炎発症のリスクも減少し、気持ちも前向きに、何より食事が楽しくなる。

「薬はきっちり」体調を整えるために口から身体に取り込むものは、食べ物や栄養剤以外に内服薬がある。摂食嚥下障害のために、薬が口腔や咽頭に残留している方は少なくないが、本人は意外と気づいていない。ケアに関わるものが早く見つけ、解決方法を処方医と相談することで、治療効果の改善につながる。

「食事は楽しく・栄養はしっかり・薬はきっちり」摂食嚥下のケアは基本的全人的ケアである。具体的な症例提示により、その重要性を共有するとともに、摂食嚥下のオンライン診療の取り組みについても紹介する。

舌圧を指標とした嚥下機能に及ぼす鍼刺激の影響

Rio 鍼灸院 稲垣沙緒里

これまでに演者らは、嚥下動作において口腔から咽頭への送り込みに重要な舌運動を定量的に評価できる舌圧を指標とし、嚥下機能に及ぼす鍼刺激の影響を(1)鍼刺激部位の違い、(2)プラセボ鍼との比較、(3)鍼の持続効果、(4)多発性硬化症 (MS) 症例への効果について検討した。その結果、特に舌骨上部の廉泉穴 (CV23) への円皮鍼貼付により最大舌圧が増加すること、その効果は円皮鍼

に特異的なこと、最大舌圧の増加は7日間持続すること、MS症例でも健常者と同様に最大舌圧が増加することを報告した。また所謂老嚥の患者1例に対し廉泉穴への円皮鍼貼付と舌抵抗運動を併用した治療を行ったところ、最大舌圧の増加が認められたことを報告した。

これらより、嚥下機能低下や嚥下障害の治療における直接・間接訓練とともに鍼治療を行うことで、訓練効果を更に高める可能性がある。今後対照群を設定した比較試験を行い詳細を検討していく予定である。

嚥下障害に対する鍼治療

東北大学大学院医学系研究科 地域総合診療医育成寄附講座

東北大学病院 総合地域医療教育支援部・漢方内科 助教 金子聡一郎

東北大学病院 漢方内科は、当時、同院の老年内科に所属しており研究活動も共同で行っていた。脳血管障害の既往を持つ高齢者の嚥下機能に関する研究はその当時から行われており、口腔ケアの嚥下機能改善効果などの報告を行っている。そして、同様のプロトコルを用いての漢方方剤（半夏厚朴湯）による介入効果による嚥下機能改善効果、作用機序の解明、誤嚥性肺炎の予防効果などの報告を行った。鍼（はり）治療は、皮膚上から物理的な侵害刺激を加えることにより、その生理学的反応を治療に用いる治療手段である。当科では、漢方薬研究と同様に、老年内科所属時代のプロトコルをもちいて、鍼刺激による嚥下機能改善効果に関する研究を行っている。これまでに、下肢2カ所（足三里と太溪）への刺鍼の前後における嚥下機能改善効果、同部位へのTENS（経皮的電気刺激療法）による効果、VFによる鍼刺激の評価などの研究の後、Sham円皮鍼（偽鍼）をもちいたRCTを行った。その結果は、28日間の下肢2カ所への刺激は、偽鍼群と比較して嚥下機能を有意に改善したというものであり、この結果は脳血管障害の既往を持つ高齢者の誤嚥性肺炎の予防を期待させるものであった。